

今保育現場に求められる

「真に保育的行為」

関口はつ江

幼稚園教育要領改訂実施年となり、保育の実際がどう進んでいるかが気になるところであるが、保育の場は一層混迷を深めているように感じるのは筆者だけであろうか。子どもに任せられる自由な遊びの時間と保育者の誘導や専門の講師による

課題的な活動の時間との区別がはっきりしてきて、自由な遊び活動はできるだけ子どもに任せ、そこで生じる様々な出来事の体験をさせることが大切であるとする考えの保育をみる必要がある。しかし、そこでは子ども達の活動は安定性、主体

性を失っているように窺われるのである。

子どもの自発的な活動が保育の中心であることは言うまでもないが、子どもの遊びはその選択、実行を子ども自身に任せるにしても、子どもの能力や経験、情緒的特性に応じた適切な環境の整理や方向付け、明確な限界の提示や必要な助けがなのまま任されてしまうことは、逆に子どもには大きな負担となるであろう。自分の思いを何で、どう活動に表すか、自分にどこまでできるのかなど、方向も定まらないまま手当たり次第に行動を起こしてみたり、他の人の真似をしてみたりしたとしても、活動がまとまっていかなければ集中し続けられないであろう。満たされない思いや不安定性のために些細なことでも衝突したり意地を張ったり、変わったことや無理なことをして何か楽しみを見つけようとしたり、人の気を惹いてみたりする行動などがよう。

また、物が秩序なく散乱していたり、人の動きが錯綜している場面では、その中から自分に意味のある物を見つけたり、活動の道筋をつけて行くのは難しいことである。周りのことに気を取られ、人との調節に労力をとられるからである。

それも経験であるから大切との見方もあるが、本来の活動を見つけるのに時間がかかり過ぎて疲れて諦めてしまったり、始めたことが妨げられて意欲を失うことを考えれば、まだ発達途上にある幼児の集団においては、先ず第一に考えなければならぬことは、どの子どもも自分の活動に安心し



て取り組めるよう、全体に適度な場の設定、保護、調整が加えられることである。

次のようなある若い保育者と子ども（年中組）とのやりとりの例がある。「YやU達がトイストリーーごっこをしている。『飛び縄がほしい』と言うので、柵においた縄をとって渡す。『お友達にぶつからないようにね』とその場は言葉をかけたが、その後、武器として使ううちに、隣のクラスのAにぶつけて泣かせてしまう。『これは人につけるものではないからね』と言うと、『じゃあ何のために使うのさ』と応える。縄は渡された時点で『武器』とイメージされており、保育者の思いとかみ合わなかった」「戦いごっこにカレンダーを丸めて剣を作ってやる。颯爽と外に出て遊んでいたが、戦いごっこの中でその剣でHの頭を叩いて泣かせてしまう。『当たると痛いから、この剣では頭を叩かないでね』と言うと、

『じゃあ、何のための物なのさ』と言う」

これはたまたま同じ子どもとのやりとりであるが、子どもは言外に「先生は僕の遊び方がわかっているのだから（わかっているのなら）、僕が使うのにふさわしい物を作る（選ぶ）べきだ、或いは使い方を指示すべきだ」と、保育者としての先見のなさに抗議していると受け取れよう。

もう一つ例を示そう。子どもが色水遊びをして隣同士で色を比べて楽しんでいる。そこへ部屋の中から、「落ちている花びら揉んで入れてもいいと思うけど」と保育者が声をかける。子ども達は殆ど無視しているように見えた。しかし、水遊びが終わってから花びらを拾っていた子がいたので聞こえていたことは確かである。保育者の言葉を受け入れると今の楽しみ方が変わってくるので取り入れなかったと思われるが、保育者の言葉を見視することは子どもに居心地の悪さを感じさせた

であろう。こうしただれた助言や、求めた援助が与えられないことなどが重なると、徐々に子どもは保育者との関係を疎遠にし、勝手な行動が増えるであろう。

この頃、「何々したらいいと思うけど……」「今は何する時かな」というような、決定や判断を子どもに任せる保育者の言葉遣いを聞くが、裏を返せば保育者自らを明示せず子どもと向かい合うこととの回避とも受け取れる。しかし、子どもはどのような言い回しをされようと保育者の言葉は意味のあることとして受け止めようとし、また保育者はそうさせたいのであるから、どうとも受け取れる曖昧な表現よりも、保育者の意図を明確に伝える方が子どもは迷わず応えられるし、拒否したいときには、無視や聞き流しではなく、はっきりと「いや」とか「こうしたい」と意思表示することができることがより大切であろう。もつとも子ども

もは能力や状況等を十分に理解した上での保育者の助言や指示には素直に従うし、助言や助けを求めるものであり、子どもと保育者の関係は保育者のあり方の関数と言える。

「子ども自身に解決させる、経験させる」との発想は、保育者の目を子どもの内面よりも表れる活動をどうするかに向けたようである。しかし、保育者の役割の第一は活動が生まれるための基盤作りであり、なかでも物心両面での安定と秩序を作ることではなからうか。遊具が踏みつけられ、人が突き飛ばされても、何も感じないような状態であってはどんなに面白い遊びが展開しても、人間の形成という幼児教育本来の目的からすれば問題である。教育に世間の目が集まっている今、保育者にも生活者、教育者としての良識が問われていると思うのである。

(鶴見大学短期大学部)